

## 第5回アジア農村医学会印象記

福井県立精神病院長 草野 亮

### はじめに

太陽と微笑の国、タイ国で、1990年11月25日より28日の4日間、バンコク郊外のマヒドール大学、アジア健康増進研究所(AIHD)において第5回アジア農村医学会が開催された。

筆者は、先に、第9回と第10回国際農村医学会（ニュージーランドとハンガリー）に参加して、その印象記を当誌に寄稿したが、アジア農村医学会は今回が初めての経験で、発展途上国の農村医療の現状を目のあたりにして、前二者とはまた異なった感慨をもった。

北陸からの当学会の参加は筆者のみであった。学会にはほとんど毎回ご出席の豊田文一金沢大学名誉教授のおられなかったのはまことに淋しいかぎりであった。最初はエントリ一されておられたが、ご都合でキャンセルされたということで、同行の日本農村医学会の理事の方々からその事情などいろいろ聞かれたが、私は返答に困った。

### 学会について

学会場のマヒドール大学、アジア健康増進研究所(AIHD)は、バンコク市の南の郊外にあった。広々とひろがる平野のなかに、すがすがしい木立に囲まれて、広いキャンパスの中に隣接して建っている。

開会式は大学の講堂で行われたが、参加国の国旗の並ぶ演壇には、国際会議の華やかさがあつた。当学会長トリシュナナング博士の開会の挨拶のあと、WHOの代表者や国際農村医学会ヨーロッパ部会の代表などの祝辞、地元の有力者の歓迎の挨拶などがあり、開会の幕

が切って落とされた。



学会のメイン会場前にて  
—マヒドール大学—

当学会長のトリシュナナング博士の挨拶は、以下のようであった。

「アジア太平洋地域の内外のさまざまな国から、代表の方々がこの重要な学会に集まって来られたことに対して、私が挨拶をすることは大変名誉なことです。本学会では、農村医学分野の知識や経験やアイデアを交換するばかりでなく、お互いに知己を得て、将来のより良い協力関係が生まれることでしょう。



開会式風景

アジア農村医学会は、すでに4回開催されました。第1回は1973年、日本において約30人の参加者を得ておこなわれました。2回目はイランのテヘランで1975年に、3回目は韓国のソウルで1985年に、4回目は中国の北京で1988年におこなわれました。



歓迎のレセプション①  
—舟のような楽器がみえる—



歓迎レセプション②  
—タイの通り—



歓迎レセプション③  
—バーベキュー方式で行われた—

今回は、国際農村医学会のアジア部会の賛助のもとに、タイ国の予防医学協会が主催となって行われるものです。

わがアジア諸国のように、国の経済が農業収入に主に依存しているような発展途上国では、プライマリーヘルスケアと、農村病の予防・管理によって、農村人口の健康にすべての努力が払われることがもっとも重要と考えられます。この目的達成には、農村医学の知識と技術の急速な進歩に合わせて、全関係者が対処することが必要であると思います。

この学会の主要目的は、全世界の各地から、とくに先進諸国から、疫学者、医師、科学者らが一堂に会して、疾病の予防やコントロールのもっとも良い方法を確立するために、種々の問題をディスカッションすることです。

この学会には、多くの農村医学のエキスパートが参加しておられるので、成果があがることを期待しております」と。

かくして、本学会のプログラムがはじまったが、2つの全体講演、2つの衛星シンポジウム、8つのシンポジウムがありその演題数は34題で、そのほかに一般演題が40題、ポスター発表が12題の計86題にのぼった。そのうち、日本からの演題数は17題であった。

内容の主なものをあげると、全体講演では、プライマリーヘルスケア、ウィルス疾患の疫学、ガン予防などで、日本の若月俊一院長が「日本におけるプライマリーヘルスケア研究の経験」と題して発表された。

衛星シンポジウムは、狂犬病ワクチンと日本脳炎B型ワクチンが主題であった。

そのほかのシンポジウムはHIV,EPI、ペスト、ライ病、蛇咬傷、デング熱、寄生虫、栄養などを主題として、それぞれ討論された。

一般演題は、プライマリケアから免疫、寄生虫、伝染病、栄養、精神保健などその国その国の特殊性があり、その内容は多岐にわた

っていた。

今回のアジア大会の特徴は、各種伝染病や寄生虫などの問題が多く論じられ、日本では過去の疾病となってしまったものが、開発途上国で今対策に追われていることを再認識した。一方、それらのふるい伝染病に加えて、あたらしい伝染病AIDSが急速に蔓延している状況がつぶさに報告された。

筆者は、「わが国の農村におけるメンタルヘルスケア—内観法について—」を発表した。その内容は、わが国においては現代医療の発展と農村の都市化によって、疾病構造の変化が起こり、代わって成人病や心身症、精神障害などが増加している。それらは、ストレスと関係のある疾患で、農村における未来の課題はストレスに関するものが重要になってくるであろう。その方法に日本独自の内観法がある。内観法は、仏教の修行法から由来したものであるが、現在宗教とは全く関係ない。」と述べた。すると、地元の医師やヨーロッパの方々からも、意外な反響があり、方法や応用についてさかんに質問があった。「日本の医学会に承認されているのか」という質問があり、「日本内観学会があり、大学病院や各地の一般病院で臨床的に応用されて成果をあげている」と答えた。

### 学会本部主催による王宮見学

この学会の特徴は、大会長の講演にもあったように、農村医学の学問的交流とともに、



王宮とエメラルド寺院を望む

参加者が互いに知己を得ることであり、その趣旨のもとに、開会式の前に学会本部主催による王宮（グランド・パレス）とエメラルド寺院（ワット・プラケオ）の見学があった。



王宮の宝物館（右の建物）

それらは、白亜の城壁に囲まれた1800平方メートルの敷地内にあった。欧風ルネッサンス様式とタイ伝統の建築が融合された豪華な王宮の宮殿群で、なかでもドゥント・マハ・プラサドは歴代王家のセレモニーのために建立されたクラシックな由緒ある建造物で、その高い窓から、美しい楼閣群がパノラマのように一望された。宝物殿では国宝級の人にしか公開しないという国宝の数々をこの機会に見ることができて、非常に感激であった。隣接するエメラルド寺院は、現チャクリ王朝の始祖であるラーマ一世によって1872年に建立され



エメラルド寺院付近  
—タイの国旗がみえる—

たという。タイ王室専用の礼拝堂で、タイ仏



教の総本山である。そのモザイクタイルでおおわれた美しい建物は、金の尖塔や輝かしい楼閣をもつ。エメラルド色のひすいでつくられた高さ66センチメートルの座仏像は威風堂々として、その下で、瞑想している市民の姿が多くみられた。一方、境内の周囲にめぐらした回廊の壁面には、ラマキエンの物語が叙事詩風の壁面に描かれて幻想的な気分を漂わせていた。



敬けんにおまいりする市民

## 学会最終日

参加者全員は、学会本部仕立てのバスに分乗して、バンコクから西北へ約130キロメートル、ミャンマー（ビルマ）国境に近いカンチャナブリ州に移動した。農村視察とその州の保健所、病院などを見学したのである。

うち続く平原は多毛作地帯で、稲がたわわに稔っている隣りでは、植えたばかりの青い葉が風にそよいでいた。灌漑用の川がみられたが、人工的に掘られた運河であろうか。長いあいだの生活の知恵をそこにみた。日本のように整然とは植えられておらず、それでも十分な量の米の収穫ができる。この国の広い土地と恵まれた太陽と水の自然の豊かさを感じさせた。

村のなかに、保健所があった。平屋の小さな建物で、こじんまりと、いくつかの部屋が仕切られていた。検診用具一式や健康教育用のポスターなどがあった。部落の人たちの健康教育に力を入れているとのことであった。

開放的で、集会所的な要素が感じられた。



保健所見学

見学した病院は新築されたばかりの、鉄筋2階建てであった。造成されたばかりで、木一本ない殺風景な敷地であったが、近代的な国立病院をこの地方の人たちは誇りにおもっているようであった。17年前に、10ベット、医



病院訪問



病室風景

師一人で創立したというが、この改築を機に30ベット、医師2人になったという。その他

のスタッフは、看護婦8人、サイアンティスト（臨床検査技師）1人、テクニシャン（事務職員ら）10人の総計21人であり、看護婦の勤務割は24時間制ということであった。看護婦8人は4人ずつの2つのグループに分けられ、外来担当2人、入院担当2人が24時間交代で勤務するという。外来患者数は1日に約100人で、かなりの遠方からもやってくるらし



ナース・ステーション



外来待合室風景

い。筆者が、20数年以前に、能登半島に勤務した頃の新築の病院の様子を思いだしていた。タイの現在の医療事情は、当時の日本の農村の事情と似ていると思った。ただ、事務室に置いてあるコンピューターだけが異なって、現代風であった。病院の正面玄関の内側、外来待合室の横に大きな、きらびやかな仏像が安置され、花など多くの供物が供えられていた。仏教国タイならではの風景であると思った。



病院正面の仏壇

全員バスに乗り、昼食の弁当は、ミャンマー（ビルマ）との国境近くで、ゆったりと流れるクワイ河を見おろすバンガローで食べた。



クワイ河に向かう鉄道



ゆったりと流れるクワイ河

第2次大戦中にビルマとタイを結ぶ鉄橋工事

を当時の日本軍がイギリスやオランダの捕虜や現地人などを使役して完成させたが、その間におこった悲喜こもごもな出来事や人間的交流を叙情的にえがいたデービッド・リーン監督の映画「戦場に架ける橋」の舞台であった河である。若い頃、感動して見た映画を思い出しながら、しばし感慨に耽った。



クワイ河畔のバンガロー

### 閉会式とさよならパーティ

閉会式はカンチャナブリ州のホテルで行われた。この地方では、最大のホテルであろうが、そう大きくもなく、やや古ぼけていた。



閉会式場のあったホテル前のほこら

最上階の6階の講堂で、州知事と大会長の挨拶で式は簡素に終わった。その後、会場を変

えて、さよならパーティが盛大に行われた。



「戦場に架ける橋」をバックにパーティ

クワイ河にかかる鉄橋の近くまで全員バスで行き、その付近の屋外レストランがその会場であった。夕闇がせまってくると、くだんのクワイ河鉄橋にはイルミネーションがついた。それを見ながらのパーティであった。広い河を見おろすと、上流や下流から小さな舟が集まって来た。目をこらすと、突然、鉄橋の上を日本のSLが蒸気を吐きながらゆっくりと通って行く。河の向こう岸の林の中や水の上で、爆竹や花火がさく裂する。人々の歓声もきこえる。歓声の中には、「気を付け」、「進め」の日本語も聞こえる。どうやら、第二次大戦の戦闘の再現のようである。小銃や機関銃の音がかしましくなり、飛行機の爆音が聞こえる。サーチライトの光の帯が空を探索するように動く。突然、飛行機が赤い火を吐きながら、鉄橋に激突する。鉄橋全体は、赤や青の多彩に変化するイルミネーションで、燃えるように見え、それが水面に映えて美しかった。最後に、鉄橋の床板の一部が壊れて、河面に落ちていき、壮絶なドラマが終了した。壮烈で華麗な光と音のスペクタクル・ショーであった。私どもは、複雑な気持でそれを眺めていた。

長い年月のうちに、戦争の悲惨さは風化され、忘れ去られて、ショー化されているのには驚いた。よろこぶべきことなのか、どうかはわからないが、当時の日本軍が現地の多く

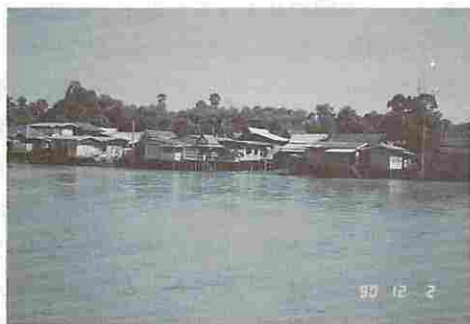


の人々を犠牲に巻き込んだが、少なくともその恨みや反日感情をいま感じられなかったのは、せめてものなぐさめであった。

レストランからバスの駐車場への道の両側には、露店がずらりとならび、日本のお祭のような雰囲気漂わせていた。悲惨な戦争が風化されたとはいえ、それをショウ化している商魂(?)のたくましさに、一方で驚きながら、帰途についた。

### アユタヤ訪問

私どもの旅の最後の日、バンコクからチャオプラヤ河(いわゆるメナム河)を、アユタヤまで、船でさかのぼった。

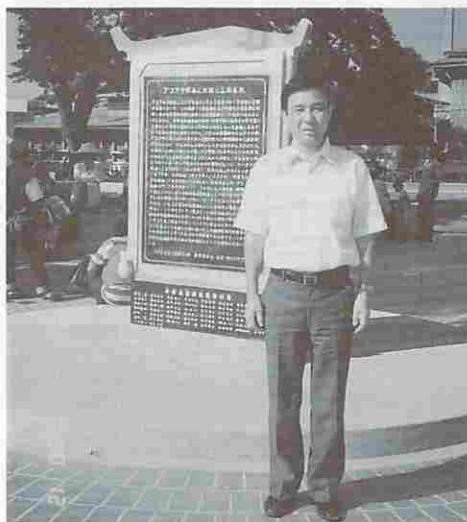


チャオプラヤ河をさかのぼる

由緒あるオリエント・ホテルの船着き場から、悠々と流れる広い河にのり出して、兩岸に美しい寺院群や高層ビルを見ながらさかのぼっていった。河の水はどんよりと濁ってきたない。自動車の往来の激しい大きなコンクリートの橋をいくつかくぐりぬけ、さらに北上していくと、あたりは緑が増え、水上生活者の家がみえた。水面に高床式の木造の家が部落をつくっている。朝の洗面、炊事、洗濯、水浴すべてが、この水であり、子ども達のあそび場もこの水面であるという。この辺まで来ると、水はすこしきれいになっているが、決して衛生的とはいえない。船上から、開け放たれた部屋の中の素朴な様子が見えた。

アユタヤは、このチャオプラヤ河の上流、

バンコクの北方77キロメートルの地点にある。1350年アユタヤ王朝が開かれ、417年間にわたってタイ王国の首都であった。14世紀にインドシナ半島最大の町として栄え、17世紀には周辺諸国や中国、西欧諸国との貿易に隆盛をきわめた。1767年ビルマの侵攻をうけ、アユタヤ王朝は滅亡した。徹底的な破壊と略奪によって、アユタヤの町は廃虚と化した。現在残っているのは、その破壊の見るも無残な遺跡群である。日本人がこの地に多く住み、山田長政らが活躍したのは、17世紀の頃であった。私たちは、山田長政の碑とアユタヤ日本人町の跡を訪れ、往時の日本人達の活躍を偲んだ。



山田長政碑の前にて



日本人町の跡

## タイ国雑感

私なりにこの機会に感じたことなどを、もう少し記してみたい。

われわれが、バンコク市郊外のドン・ムアン空港に着いたのは、午後4時をすこし過ぎていた。空港からバンコク市内までは、バスで約1時間の距離であった。11月下旬といえば、日本では肌寒く、そろそろ冬仕度の季節であったが、南国タイに来て再び夏に逆戻りするの、うれしかった。タイには雨期と乾期があって、私どもが訪問した時期は最も季節のよい乾期で、日本の8月下旬の気候であった。

さて、空港から市内への自動車道路は広がった。一部では片側3車線あり、右や左から自動車が追い抜いていく。みな100キロ以上のスピードを出している。車体の後にTOYOTA、MITSUBISHI、NISSANなど日本の会社名が大きく書かれた車が目につく。日本車が実に多い。80~90%が日本車だという。一方、あちこちに建築中の鉄骨やクレーンがやたらに目につく。建築ラッシュだという。開発途上国というよりは、近代都市のたくましいエネルギーを感じさせた。この1、2年、地価が急上昇し、物価もあがり、インフレ傾向だという。例えば、自動車の値段はこの1年間で1.5倍に、アパートの家賃は2倍にはね上がったという。日本の昭和30年代後半のあの高度経済成長期の時代に似ていると思った。市街地に入ると、ラッシュの時間帯で、クルマは混雑を極めていた。クルマが渋滞すると、クーラーの効きもわるくなり、車内は暑くなった。しかし、他の市内バスは全部クーラーなしで、窓を開け放し車内に現地人がすし詰めに乗っている。出入口のタラップにも、人がしがみついている。市民の生活振りは、日本の昭和20年代のすさまじい時期に似ていた。市民の服装も地味で汚い。

ほこりっぽい歩道には、露店が立ち並び、飲食物や花や木彫品などを賣っている。スリ

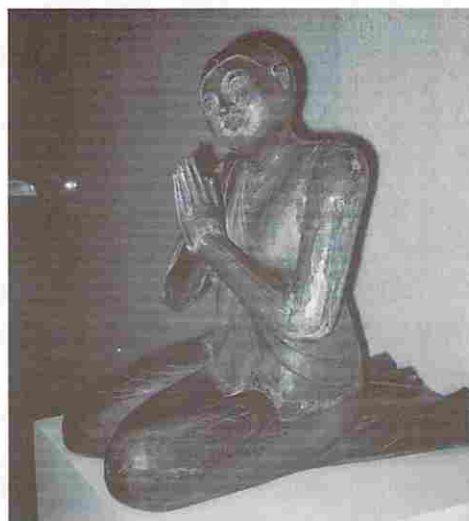
が多いので、所持品にはくれぐれも注意するようにと、添乗員から何度もいわれた。

一方、日本の企業がどんどんバンコク市内に進出し、そごうや大丸など有名デパートや商社が目だった。

学会開催中、私どもが滞在したホテルはリージェント・ホテルといい、一流のホテルであった。フロントに入ると、正面の大きな壁画に、ようやく外国に来たという異国情緒をかきたてられた。ホテル内のあちこちを歩くと、一寸した場所に木彫などが置かれ、タイ独特な芸術的雰囲気醸し出していた。



ホテル内の壁画



ホテル内の木彫

翌朝の食堂の正面には、白鳥の氷の彫刻がかざられていた。街のフルーツ店やレストラ



ンなどでは、パパイヤなどのフルーツに彫刻刀をふるって、花模様をつくっている女の人の姿をよく見かけた。手の器用な芸術的な民族という印象をもった。

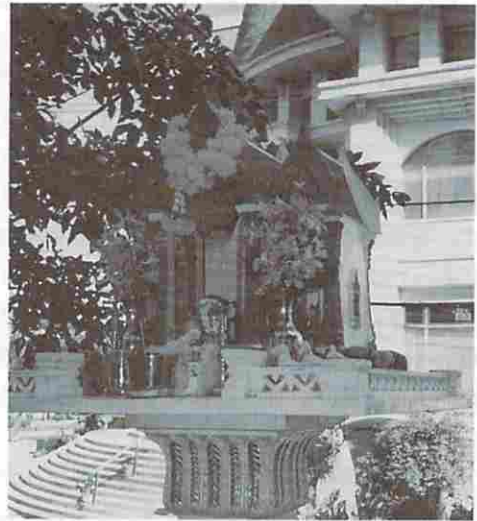


氷の芸術—白鳥—

ホテルの周囲を散策してみると、ホテルの裏に、三角屋根の小さな家型の箱が白い柱の上に乗っていた。何だろうと思って、近づいてのぞいてみると、なかに仏像を安置してあった。あたらしい花がそなえられていた。そのようなほこらは、病院やデパートや会社などいろいろな所でもお目にかかることができた。

タイは仏教国である。日本以上に仏教が生活の隅々にまで浸透しているように思われた。タイの国旗は、青、白、赤の三色旗で、白は仏教を象徴しているという。タイの男性は成人に達すると、一定期間かならず仏門に入り修行するという。国王は仏教の守護者と憲法に規定されているという。国王は率先して貧民に手をさしのべ、恵みを垂れて、国民に信頼と尊敬の念をもたれている。仏教は、人にたいして、功德の積み重ねをすることが救われる道であると説いている。人々は、現世に起こるすべてのことは、前世における業の結果と考え、現在の身分や生活状況に不満をあ

まりもたないという。



ホテル裏の祠

この国は貧富の差の激しい国である。国民の大部分が貧しく、富者はほんの数%だという。このほんの数%の高額所得者を相手に、タイの商売が成り立っているのだといわれる。

スラムはいたるところにみられる。高速道路の下とか、廃線となった線路など、わずかな空き地があると、スラムの生活が始まる。しかし、身なりは汚くても、表情は明るく、心はあたたかい。相互扶助の精神が旺盛で、お互いに助け合って生きている。

いくら貧しくても、この国の近隣に較べると、まだましであり、餓死するものはいないという。一年中平均した温暖な気候、一年中何回でもとれる穀物や豊富な果物や魚介類など自然の恵みが豊かなせいもあるが、この相互扶助の精神も大きいと思われる。冒頭に述べたごとく、タイは別名「微笑の国」といわれる。この国の挨拶は、ワイ（合掌）である。

微笑みをたたえながら、両手を合わせて挨拶する姿に、私は日々感謝するタイの人々の心を見たような気がした。

## おわりに

はじめての東南アジアへの旅行であったので、私にはなにもかもが珍しかった。10日間の短い滞在の、一旅行者の感想に過ぎないが、短期間の印象が意味のある場合もあるので、記させていただいた。

最後に、ホテル滞在の前半は、昨年（1987年）の第39回日本農村医学会長の遠藤良一院長と同じ部屋で個人的にもいろいろと教えていただき、後半は日本農村医学会副理事長の内田昭夫千

葉大学教授と同室にさせていただいて、有意義な日々を過ごすことができたのは大きな収穫であった。

## 参考文献

- 1) 草野 亮：第9回国際農村医学会印象記，富山県農村医学研究会誌，16：183-189，1985.
- 2) 草野 亮：第10回国際農村医学会印象記，富山県農村医学研究会誌，19：88-95，1988.